

【特集：橋本毅彦先生ご退職記念】

## 試論・『図説 科学史入門』という「アトラス」について

田中 祐理子<sup>1</sup>

「科学史」を学びたい以上、自然科学に現在進行形で関わっている「科学者」たちと「同僚」として会話する場面も少なくないですが、そのときにはより一層、「科学史とは何か?」「なぜあなたは科学史を研究するのか?」と真剣に不思議がられることがあります。「科学史」を当然に歴史研究の一分野と捉えていない、つまり「科学史」になんとなく慣れてしまったりしていない「同僚」たちから、「あなたはなぜこの領域で〈研究者〉であろうとするのですか?」「そのときの〈研究者〉とは、どのような存在であろうとするのですか?」と、興味津々で訊かれることがあるのです。

ちなみに、このとき「真剣に」・「興味津々で」訊いてくれる「同僚」たちは、面白いほど一様に自分の研究分野が大好きであるというのが、私が個人的に抱いている経験にもとづく感覚です。この、自分がいま取り組んでいる世界、活動、対象、この面白い「生きもの」のような大切なものに、なぜあなたは「歴史」で関わろうとするのか?——きっとそのとき、あなたも何か「面白さ」を感じているのでしょう、私がまさにいま・ここで、そうしているように。いわば、「科学者」たちは「科学史」に、そんな問いかけをしているのではないかと感じます。

そのような対話の結果、私はそのとき自分が持っていた『図説 科学史入門』（ちくま新書、2016年）をひとにあげてしまう、ということがこれまでに幾度もありました。そのため、仕事場と私用と、基本的に複数部を備えておくべき書籍、と位置づけています。上記のような「同僚」以外にも、思想史や哲学の勉強を一緒にしていた学生が科学史とは何なのかと興味をもった様子の際にも、つい持ち帰らせてしまいます。この本が刊行されて以降、それは「科学史研究の面白さ」とともに「科学の歴史を記述する意義」を示すことのできる、

1 神戸大学大学院国際文化学研究所准教授。Email: tanaka.yuriko@people.kobe-u.ac.jp

私にとっての重要な指針そのものとなっているからです。ただ、学生が一回で面白さの全部を感じ取ることはないだろうとも思っています。一読したときに自分にとっての中心的な筋が読めたとしたら、二回目に読むときには、その筋に並行している異なる筋に興味を持ってほしい。そして三回目には、さらに別の筋が並走していることに。

科学の歴史にただひとつの中心はない——『図説 科学史入門』は、この事実を、一冊の本の形で私たちに体感させます。「科学者が器具を通して生命や物質を観察したり、理論的考察を通してある種のパターンを認識したりする。観察した画像、想像したパターンは、その科学者によってスケッチに描かれたり、プロの画家によってイラストレーションに描かれたりする。〔…〕読者が見るのは、実際の自然界に存在する——物や現象そのものの姿ではなく、何段階ものステップを経て紙の上に表現された事物である」（336頁）。

「自分が」見た、「私が」発見したと、この一冊のなかの、頁ごとに現れる幾多の科学史上の重要人物たちがそれぞれに確信したろう「真実」「事実」「新たな自然」があります。ですが、科学的営為において、それらは必ず周囲の人々に「共通の同一世界」を構成しているものとして提示されなければなりません。「見つけた」「知った」特権的な主体から、「見られた」「知られた」世界はすぐに離れることができなくてはなりません。「客観性」が獲得されるときに、「発見者」から、その「自然」はどこかへと剥奪されていきます。あるいは、すでに剥奪されています。かつそれは「実際の自然界に存在する物や現象そのものの姿ではなく」、つまり、それはいかなる「世界」や「自然」の創造主にも帰属できません。それでいながら、この一冊のなかに書き込まれた無数の科学史的場面とその知的産物たる科学認識の総体は、なぜか「私たち」がいま・ここで生きている「世界」を、確かに生みだしているものと思われるのです。

このようなものとしての「世界」、「自然」、「認識」、「歴史」を知ろうとすることは、いったい何を私たちにもたらすのでしょうか。

橋本毅彦著「最近の図像をめぐる科学史研究について—クラウス・ヘンツェルを中心に」（『哲学・科学史論叢』第24号、2022年）には、次のような問いかけがあります。「〔ラドウィックの〕論文タイトルが「地質科学のための視覚言

語の出現」とあるように、扱われる各種の図像—鉱物地図、地層図、風景画—は一種の言語と見なされ、その言語が特定の人々によって構成される共同体の成員間でのコミュニケーションで使用されることが示される」(59頁)のであるが、ではそのうえで、「図像を視覚言語として捉え、それを利用したコミュニケーションという場に焦点を当てるとき、一つの課題として読者の問題が浮かび上がる。科学的言説に各種の図像が使われたときに、その読者は図をどのように受けとめたのだろうか。著者の意味すること、意図することは、正確に十分に読者に伝わただろうか。読者の受けとめ方に著者自身との理解、また読者間の間で違いはなかつただろうか」(59-60頁)。

「コミュニケーション」という、いかなる個人の手元にも留まることのない、多性と躍動に満ちた「世界」を知ることが、確かにただひたすら「面白い」としか言いようのない経験ではないでしょうか。橋本先生の筆致から私は歴史研究の力を教えられる思いです。いつも真似しようと試みるのですが、まだ遥かに遠い目標です。